

アルコール依存症に対する看護学生のもつイメージの構造

平田 直美¹⁾, 牛ノ濱幸代¹⁾, 末吉 朋²⁾

要 旨

看護学生のアルコール依存症に対する「イメージ」を把握し、主因法による因子分析によりイメージの構造を探索した。そして、イメージの構成因子と知識、自尊感情の関連を探索した。

看護学生はアルコール依存症に対し、『古典的アル中イメージ、の弱まり』『厳しい引きこもり』『揺れていて拠り所の無さ』『緩慢な複雑さ』4つに因子で構成されるイメージをもっていた。

看護学生のアルコール依存症に関する知識は概ね正確であるが、例えば「アル中」について修正する余地がある。

学生は全体的に自尊感情が低く、自尊感情の得点が低くなるほど、学生がもつアルコール依存症イメージ第4因子『緩慢な複雑さ』因子得点が高くなる、弱い相関を認めた。

正しい知識と『アル中』イメージが統合されず乖離すると推測される。『アル中』はアルコール依存症の俗称で同じ現象であることとともに、アルコール依存症を知識面で修正する余地があることの示唆を得た。

看護者は依存症の心理特性である「否認」を理解し患者の「否認」を適切に処理することが、患者の病の克服につながることを、看護学生はまず認識を強くすることが大切と考える。

キーワード：アルコール依存症、意味差分別法、イメージ、看護学生、自尊感情

はじめに

アルコール総消費量が先進国で減少する中、わが国はいまだ抑制がみられず、約230~250万人の大量飲酒者が存在する¹⁾。臨床の場で看護職がアルコール依存症者を含んだ認知的、行動的、身体的、精神的症状をしめす問題飲酒者に遭遇する機会は少なくない^{2~3)}。

アルコール中毒からアルコール依存症の言葉がWHOに提唱され1964年に変わった⁴⁾。

「アル中」というと、生活破綻者・浮浪者・肉体労働者の中年男性のイメージが存在するが、最近、女性・未成年、高齢者に問題飲酒が目立ってきている⁵⁾。

看護職者を含め医療従事者においてもアルコール依存症の理解不足や否定的なイメージの定着は否定できない^{6~7)}。

看護教育のみならず、医療従事者医療従事者はアルコール依存症についての十分な教育・研修が行われてきたとは言いがたく、教育・卒後の場においてアルコール依存症に関するカリキュラムの改善について必要性がうたわ

1) 鹿児島純心女子大学看護栄養学部看護学科

2) 現 南大阪発達療育センター

れている⁸⁾。

人は物事を捉える時、その情報不足分を過去の経験や知識から予測可能なイメージに基づいて認知する。そして、自己や他者を捉えるとき、過去の経験からの期待に合致するように自己や他者を再構成する傾向にある⁹⁾。

カリキュラム変更で期待されるのは、まずは正しい知識の獲得とイメージの是正である。

ところで、イメージの是正がはかれた基礎資料となる、看護学生のアルコール依存症者へ抱くイメージを測定した調査は見当たらない。

そこで、

1. 看護学生のアルコール依存症に対する知識、「イメージ」、学生の自尊感情を把握する。
2. 「イメージ」の構造を探索する。
3. 「イメージ」の構造と知識、自尊感情との関連を探索する。

以上を目的として調査をおこなった。

対 象

K県にある私立女子大学看護学科1、2年生93名。有効回答は90名(96.8%)。

方 法

1. 研究期間 平成17年12月
2. 測定と調査
 - 1) 学生にアルコール依存症者に関する知識、イメージ、自尊感情を質問紙により測定する。イメージは、意味差別法により20項目5点法にて自己作成した。自尊感情は、M. ローゼンバーグが開発した10項目からなる尺度を使用した。
 - 2) 統計パッケージSPSSver.14.0を使用してデータを分析した。イメージを5点法により

20項目を測定し、次に主因法により固有値の推移をもとに因子分析により4つの因子を抽出し、バリマックス回転を施した。

3) 倫理上の配慮

- ①質問紙配布時に調査の目的を説明し、同意あれば質問紙に記載し提出する旨を説明する。
- ②質問紙の内容は今後の成績と一切関連がないことを明確にする。
- ③データは統計処理し、集団としてのみ取り扱うことを明確にする。
- ④結果の公表は講義「看護研究法」、該当する関連学会、大学紀要で報告する予定である。

以上を説明し、学生の上承を得た。

結 果

1. アルコール依存症のイメージ

イメージを因子分析した結果、以下の4つの因子で構成されていた。(表1)

因子分析の結果に基づき、各因子を構成する項目の点数を表示すると図1に結果をしめす。

第1～4因子の寄与率は、17.196%、11.853%、11.726%、8.342%である。累積寄与率は49.118%になる。

第1因子は「だらしない」「俗っぽい」「醜い」「男性的」「悪い」「苦しい」「怖い」から構成される。因子負荷量は、0.675、0.636、0.620、0.613、0.583、0.582、0.558である。因子得点0を分岐点とし二つの群に分け第1因子を構成する各項目の得点を確認すると、因子得点が高い群は点数が中央に寄っていた(図1)。つまり、全対象は「だらしない」対「しっかりしている」において、「だらしない」を選択する傾向にあり、そして、因子得点が高い群は低い群より、その印象が薄く弱くなっていた。それは第1因子を構成する全ての項

表1 アルコール依存症に対する看護学生のイメージの構造

項目内容	因子負荷量				共通性
	因子1	因子2	因子3	因子4	
1. 古典的アル中イメージ、の弱まり					
だらしない しっかり	0.675				0.565
俗っぽい 高尚な	0.636				0.478
醜い 美しい	0.62*				0.517
男性的 女性的	0.613				0.422
悪い よい	0.583				0.437
くるしい やすらぎの	0.582				0.482
怖い うれしい	0.558				0.482
親しみにくい 親しみやすい	0.462				0.435
2. 厳しい引きこもり					
冷たい あたたかい		0.766			0.619
閉じた 開いた		0.724			0.541
かたい やわらかい		0.695			0.617
からい 甘い		0.318			
3. 揺れている拠り所の無さ					
動いている 静かな			0.632		0.562
連続している 断続している			0.614		0.389
不安定な 安定した			0.554		0.534
激しい 穏やか			0.481		0.381
張りつめた ゆったりした			0.463		0.411
4. 緩慢な複雑さ					
遅い 速い				0.736	0.65*
複雑な 単純な				0.659	0.705
嫌い 好き				0.441	0.37*
固有値	3.489	2.371	2.345	1.668	
寄与率(%)	17.196	11.853	11.726	8.342	
累積寄与率(%)	17.196	29.049	40.776	49.118	

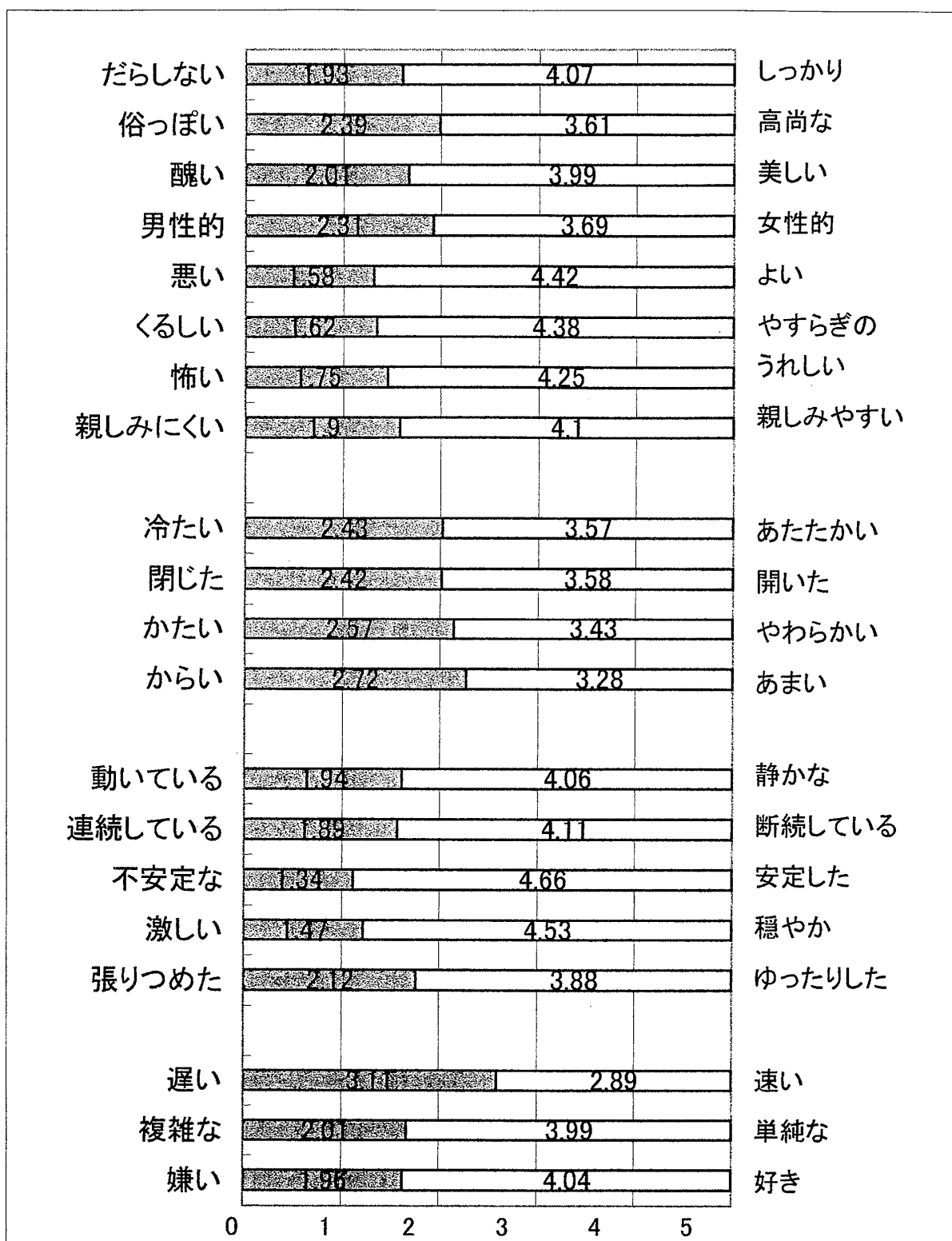


図1 アルコール依存症のイメージ

目においてその傾向を認めた。そこで、『古典的アル中のイメージ、の弱まり』とした。

第2因子は「冷たい」「閉じた」「かたい」から構成される。因子負荷量は、0.766, 0.724, 0.689である。『厳しい引きこもり』とした。

第3因子は「動いている」「連続している」「不安定な」から構成される。因子負荷量は、0.623, 0.613, 0.554である。『揺れていて拠り所の無さ』とした。

第4因子は「遅い」「複雑な」から構成される。因子負荷量は、0.736, 0.659である。『緩慢な複雑さ』とした。

2. 知識

正解の平均は8.57問であり、設問は10題で平均正解率は85.7%となる。

知識に関する10項目は信頼係数 $\alpha = .206$ であり、項目毎に検討する。

正解率は20.0~98.9%を示した。(図2~11) 正解率の高い項目は、「手が震えないから『アル中』ではない」(=誤り, が正解で98.9%)

「アルコール依存症は『中年男』の病気である」(=誤り, が正解で97.9%)であった。

この2項目を含む8項目は正解率が80%以上であった。

正解率の低い項目は、「アルコール依存症がひどくなると『アル中』になる」(=誤り, が正解で20.0%), とかなり低い。次に正解率が低いのは75.6%の「アルコール依存症になる人は意志が弱い人である」(=誤りが正解)であった。

3. 自尊感情

尺度の信頼性は $\alpha = .683$ であり信頼性を認めた。平均4.93, SDは2.142であった。自尊感情の6点以下は「低い自尊感情」に区分され、集団としては自尊感情が低い傾向にある。

4. イメージと関連する項目

1) 知識との関連

各問いの正解とイメージ4因子との関連をT検定にて確認した。有意差を認めたのは各因子で以下の設問において認めた。

① 第2因子

『厳しく引きこもっている』と「アルコール依存症はひとりでは回復できない。助けを求め、お互いに支えあうことが重要である。」の不正解者(n=2)は-0.040, 正解者(n=86)は1.149 (t=2.062, p=.042)と不正解者の因子得点が低かった。ただし、2群の対象数が偏っており、参考程度としたい。

② 第3因子

「アルコール依存症になる人は意志の弱い人である」(=誤りが正解)の不正解者(n=22)は.137, 正解者(n=67)は-.416 (t=-2.31, p=.0249)と不正解者は得点が高かった。

2) 自己肯定感との関連

自己肯定感と第4因子『緩慢な複雑さ』は相関係数-.252 (p=0.018)であった。弱い負の相関を認めた。他の因子との関連は認めなかった。

考 察

1. イメージ

講義前において、4つの因子でほぼ5割を説明できた。

その三分の一を占めた最初のイメージは、『古典的アル中イメージ、の弱まり』である。意志薄弱で醜く男性的な、いわゆる昔からある社会から逸脱した、だらしのない男性の「アル中」のイメージが浮かび上がってきた。ところで、注目するのは、この因子得点が高いほど、このイメージが弱くなっていることである¹⁰⁾。生活破綻者・浮浪者・肉体労働者の男性を連想する『アル中』のイメージはある

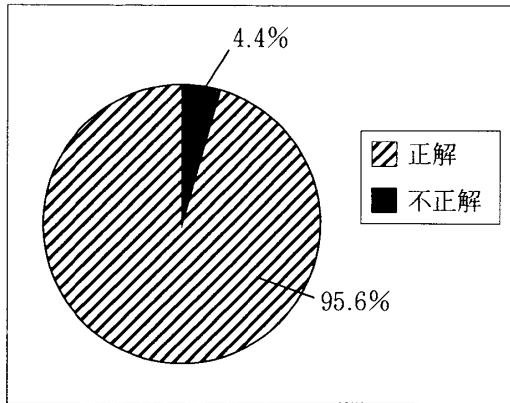


図2 アルコール依存症は今日こそ飲まずにいようと思っても、つい飲んでしまう人

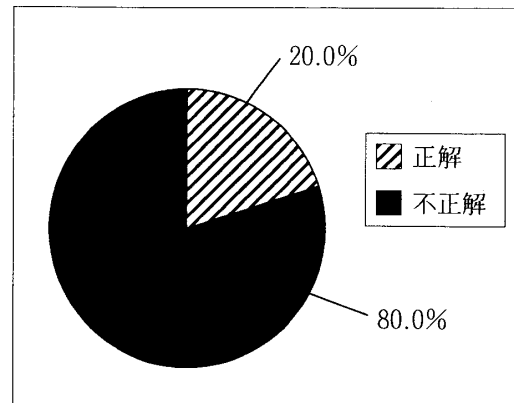


図5 アルコール依存症がひどくなると「アル中」になる

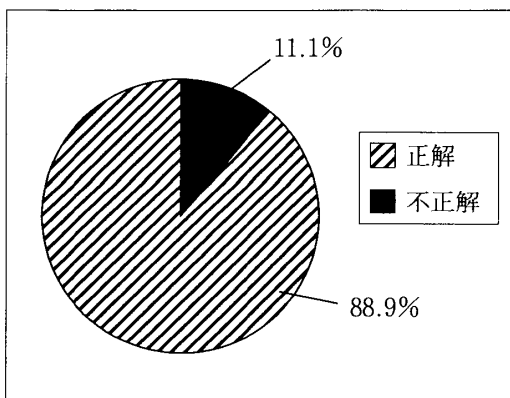


図3 アルコールに依存の場合、すぐにきりあげようと思うが、酔いつぶれるまでのんでしまう

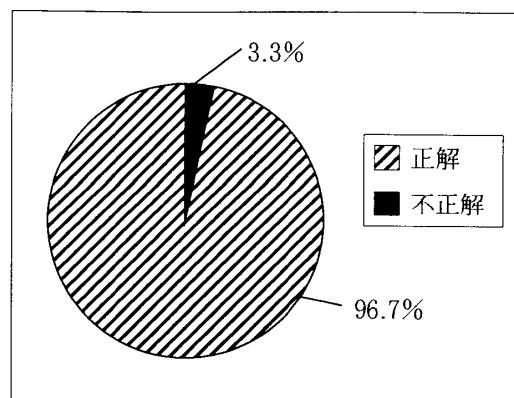


図6 アルコール度の軽いお酒だけ飲んでいれば、アルコール依存症になることはない。

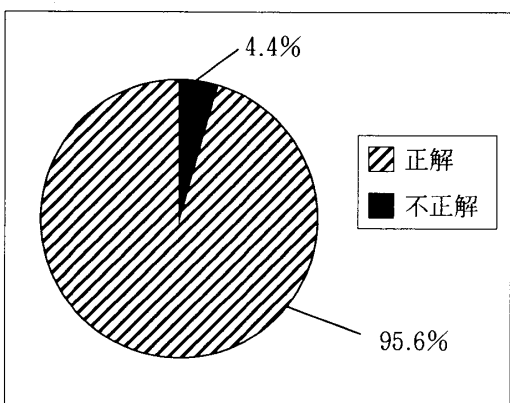


図4 アルコールに依存してくると、お酒による害があっても、酒をやめられない。

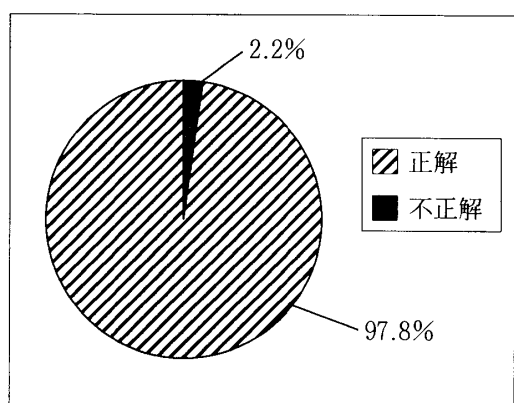


図7 アルコール依存症は「中年男」の病気である。

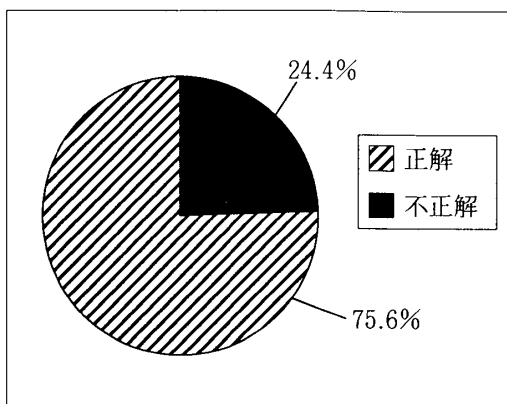


図8 アルコール依存症になる人は意思の弱い人である

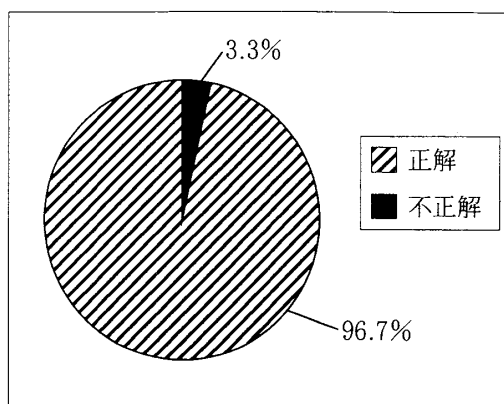


図10 アルコール依存症はひとりでは回復できない。助けを求め、お互いに支えあうことが大事である

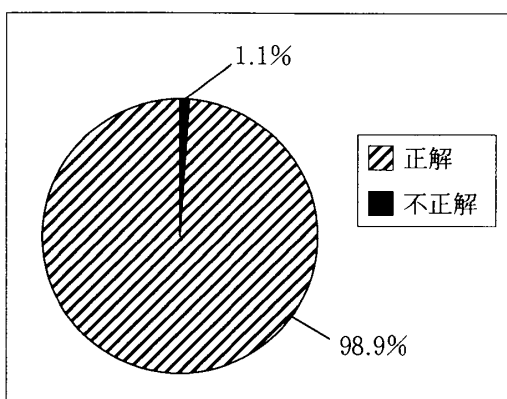


図9 手がふるえないから「アル中」でない

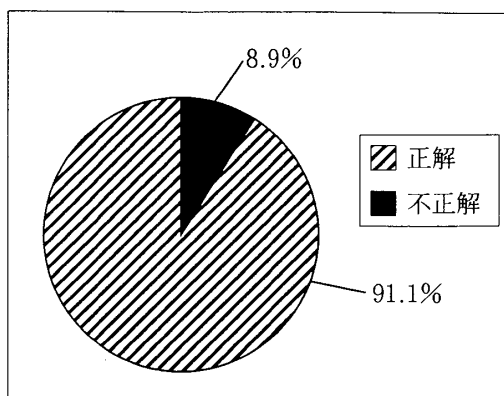


図11 AA, 断酒会ともアルコール依存症のセルフヘルプグループである

が、その印象がマイルドになってきている。最近、女性・未成年、高齢者に問題飲酒が目立ってきている傾向が常識として浸透してきていると推測可能である。

次に強いイメージは『厳しく引きこもっている』であった。自助グループの意義を問う設問に対する不正解者がこの因子得点が高くなっていた。つまり、自助グループのもつ仲間による相互援助を認知していない場合、『厳しく引きこもっている』とイメージする傾向を推測する。依存症が治療につながっていない、あるいは治療が繋がらないアルコール依存症の状態は、社会から逸脱した、非社会

的な状態に多くはある。このイメージは全く外れているわけではない。しかし、アルコール依存症の回復者、及びその自助グループの活動は情緒的に安定させ、精神性を高め、断酒の継続を可能にして行うことが多く実証されている^{11~13)}。アルコール依存症者を援助する立場にたつ場合、アルコール依存症の回復を目標に援助していくことが、援助者・患者ともどもその予後のために期待される。『厳しく引きこもっている』と同じ程度にアルコール依存症にもたれる3つめのイメージが『揺れていて拠り所の無さ』である。意思の弱さ

とは関連がないとの認識の高さと因子得点が比例している。アルコール依存症を単なる意志薄弱の表れと捉えるのではなく、病気として把握しているほど、この因子が強くなると推測できる。松下¹⁴⁾によると、アルコール依存症者が自己イメージとして他者との比較から自己を位置づける傾向を認めている。看護学生がアルコール依存症の背後にある「見捨てられ不安」を把握していると解釈可能であり、病気の本質をついている可能性がある。

4つめイメージが『緩慢な複雑さ』である。複雑なわからなさからくる戸惑い、不安が伺えた。今回の調査対象は全体的に自己肯定感が低い集団であった。また学生の自己肯定感が弱いほどこの因子得点が高くなる、つまり不快感が高まる傾向が認められた。

2. 知識、及びイメージとの関連

看護学生のアルコール依存症に関する知識は、正解率がほとんど8割以上と概ね正確な中で、「アルコール依存症がひどくなると『アル中』になる」(=誤り)の正解率が20.0%と圧倒的に低い結果となった。知識が普及している一方、古典的な『アル中』のイメージが存在している。正しい知識と『アル中』イメージが統合されず乖離して存在していると推測される。『アル中』はアルコール依存症の俗称で同じ現症であることとともに、アルコール依存症を知識面で修正する余地があることの示唆を得た。

第2因子『厳しく引きこもっている』において、「アルコール依存症はひとりでは回復できない。助けを求め、お互いに支えあうことが重要である。」の不正解者は、因子得点が低かった。自助グループの存在や活動の有効性を知ること、普及することが、このイメージの変容に影響すると期待される。

「アルコール依存症になる人は意思の弱い人である」(=誤りが正解)における正解者は第3因子『揺れていて拠り所の無さ』の得点が高かった。アルコール依存症者が自己存在の価値を自分の内部でなく外部に持ち、すなわち不安定な評価基準をもっていることは知られている^{15~16)}。単純に意志の弱さが飲酒行動の問題を引き起こすのではなく、「頭で止める必要性がわかってもコントロールを喪失する病」であるとの、アルコール依存症の本質的理解につながっていた可能性が低いと推測される。

3. 自尊感情、及びイメージとの関連

看護学生の自尊感情の得点が低くなるほど、学生がもつアルコール依存症イメージ第4因子『緩慢な複雑さ』因子得点が高くなる、弱い相関を認めた。

自信のなさから来る、判断への戸惑いが、対象をとらえどころの無いと把握する傾向を推測した。とらえどころの無さと緩慢さ、複雑さの関連を感じている。

自己のイメージが他者のイメージに反映し、自己イメージが悪いと他者のイメージが悪くなると考えるとき、納得のできる結果である。

学生が、将来援助者としてアルコール依存症者に対するとき、安定した希望ある目標をもって援助するためには、この自己イメージ低下が払拭できる、学生への支援が望まれる。

浦野ら¹⁷⁾によると、アルコール依存症の専門治療病棟や専門治療室に勤務する看護者の8割がアルコール依存症者に対し陰性感情¹⁸⁾をもっていた。アルコール依存症者の看護において、患者の回復を信じ、回復を支える¹⁹⁾受容的かつ情熱的姿勢が求められる。まず、アルコール依存症者を看護する看護者が患者の言動を肯定的かつ客観的に捉えることが可

能になる看護者の育成が期待される。

陰性感情を引き起こしやすい患者の言動を、肯定的に客観的に把握し自己尊重できる訓練²⁰⁾が看護学生の時点から必要であると考えられる。特に、自己イメージが低い学生に対し、陰性感情を容易に抱く傾向を推測し、他者尊重と同時に自己尊重できる訓練、例えばアサーティブトレーニングの導入で陰性感情を抱きやすい可能性の低下を期待する。

また、依存症の心理特性である「否認」「自己中心性」を理解し、この「否認」の適正な処理と、アルコール依存症者の「否認」課題を克服することが治療者に求められていること²¹⁾を、看護学生がまずは認識を強くすることが大切と考える。加えて、看護学生は、情意レベル、行動レベルの能力の獲得が必要になる。この能力の獲得により、アルコール依存症者が「否認」の課題を克服し、回復し、回復を継続できることへの支援を看護学生に可能にすると期待する。

おわりに

看護学生のアルコール依存症に対する知識は、「イメージ」、学生の自尊感情を把握した。

看護学生のアルコール依存症に関する知識は、正解率がほとんど8割以上と概ね正確であった。同時に、正解率20%の低い正解率の知識に関する項目が存在した。

「イメージ」を意味分析法で測定し因子分析で構造を探索した結果、4つの因子で構成されていた。

最初のイメージは、『古典的アル中イメージ、の弱まり』である。意志薄弱で醜く男性的な、「アル中」のイメージが浮かび上がってきたが、その印象がマイルドになっている。

次に強いイメージは『厳しく引きこもって

いる』であった。アルコール依存症者を援助する立場にたつ場合、自助グループへの参加により回復が可能であることの認識を強める必要性を期待する。

3つめのイメージが『揺れていて拠り所の無さ』である。アルコール依存症を病気として把握しているほど、この因子が強くなると推測できる。

4つめのイメージが『緩慢な複雑さ』である。複雑なわからなさからくる戸惑い、不安が伺えた。学生の自尊感情が弱いほど、この因子得点が高くなる傾向が認められた。

本研究は、対象選定における標本の偏りが存在する。よって、結果の一般化に困難が生じる。また、知識、イメージの測定用具の妥当性、信頼性の獲得が今後の課題である。

正しい知識と『アル中』イメージが統合されず乖離すると推測される『アル中』はアルコール依存症の俗称で同じ現象であることとともに、アルコール依存症を知識面で修正する余地があることの示唆を得た。看護者は依存症の心理特性である「否認」を理解し「否認」を適切に処理することが患者の克服につながることを、看護学生はまず認識を強くすることが大切と考える。そして、看護学生が他者尊重と同時に自己尊重する訓練によって、学生が自分も他人も大切にできる能力の育成の必要性の示唆を得た。

文 献

- 1) 白倉克之, 澤山 透: アルコール関連疾患をめぐって, 白倉克之, 丸山勝也編: アルコール医療入門, 新興医学出版会, 1-5, 2001.
- 2) 洲脇 寛: 嗜癖 精神医学の展開, 新興医学出版社, 53-92, 2005.

- 3) 嵐 里美, 川田和人: アルコール依存症看護で生じる看護者の陰性感情とその要因に関する一考察, 日精協誌, 21
- 4) 前掲1)
- 5) 前掲1)
- 6) 洲脇 寛: Alcohol Education〜誰に向かって何をするか, 日本アルコール関連問題学会雑誌, 5, 7-10, 2003.
- 7) 石毛奈緒子, 林 直樹: アルコール依存症患者と統合失調症(分裂病)患者に対するイメージの調査, 日本社会精神医学会雑誌, 12, 1, 2003.
- 8) 前掲6)
- 9) 塩谷育子他: アルコール依存症者と糖尿病患者の語りの比較, 日本保健医療科学会年報, 21, 2006.
- 10) 前掲1)
- 11) 松下年子: アディクション看護の現状〜欧米と日本の比較〜, アディクション看護, 3, 1, 2-12, 2006.
- 12) 松下年子: アルコール依存症者の自己意識と他者との関係性 アルコール依存症者回復者インタビュー調査から, 総合病院精神医学, 15, 2, 166-175, 2003.
- 13) 松下年子他: アルコール依存症者の回復イメージ, アディクションと看護, 19, 4, 545-553, 2003.
- 14) 前掲12)
- 15) 前掲10)
- 16) 前掲12)
- 17) 浦野洋子他: アルコール依存症者を看護する看護者の陰性感情に関する研究, 精神看護, 8, 2, 88-92, 2005.
- 18) 前掲3)
- 19) 西川京子: アルコール相談入門 回復を信じ, 回復を支える, 日本アルコール関連問題学会雑誌, 5, 36-40, 2003.
- 20) 樋口進編: アルコール保健指導マニュアル, 社会保険研究所, 2003.
- 21) 前掲17)

Student Nurses' Image Factor Analysis of Alcohol Dependence

Naomi Hirata¹, Sachiyo Ushinohama¹, Tomo Sueyoshi²

1. Department of Nursing, Faculty of Nursing and Nutrition
of Kagoshima Immaculate Heart University
2. Minami-Ohsaka Center for Development of Child with Disability

Key Words : Alcohol Dependence, Semantic Differential, Image,
Student Nurse, Self-Esteem

Abstract

In this study, we look at how the student nurses' image of alcohol dependence is created by factor analysis.

Student nurses' image of alcohol dependence results from four factors : weakening old images, extreme self-seclusion, unsteadiness, and unrecognizable complexity.

For the most part, student nurses' knowledge of alcohol dependence is right. Though there are still some assumption that need to be corrected.

Generally, student nurses have low self-esteem. From our research, there seems to be a correlation between an increased feeling of unrecognizable complexity and lower self-esteem.

From this investigation, we argue that technical knowledge is not always capable of modifying the commonly held image of the 'alcoholic', the general name for someone who is alcohol dependent, but conclude that technical knowledge is necessary to enable people to overcome alcohol dependence.

Finally, we argue that it is essential for student nurses to recognize that they can help patients get over their illness by managing their particular psychological and spiritual needs and by stopping their denial of the syndrome.
